

近代日本の憲法思想史的研究・序説

西村裕一（慶應義塾大学大学院法務研究科）

一 はじめに——自己紹介をかねて

小林よしのり（1953－）

二 天皇機関説事件

菊池武夫（1875－1955）、美濃部達吉（1873－1948）、一木喜徳郎（1867－1944）、末広厳太郎（1888－1951）、久野収（1910－1999）

三 「かのように」

最判平成 23 年 5 月 30 日民集 65 卷 4 号 1780 頁、最判平成 19 年 2 月 27 日民集 61 卷 1 号 291 頁、藤田宙靖（1940－）、森鷗外（1862－1922）、井上哲次郎（1856－1944）、出隆（1892－1980）、家永三郎（1913－2002）

四 再び、天皇機関説事件について

上杉慎吉（1878－1929）、穂積八束（1860－1912）、木庭顕（1951－）

【本報告に関連する、報告者による文献（一部）】

- 「美濃部達吉と陸軍パンフレット——または、『国家・憲法・戦争』についての学説史的考察」高橋和之先生古稀記念『現代立憲主義の諸相（上）』（有斐閣、2013 年）613 頁以下。
- 「憲法——美濃部達吉と上杉慎吉」河野有理編『近代日本政治思想史 荻生徂徠から網野善彦まで』（ナカニシヤ出版、2014 年）229 頁以下。
- 「天皇機関説事件」長谷部恭男編『論究憲法——憲法の過去から未来へ』（有斐閣、2017 年）17 頁以下。
- 「生きるために生まれたんだよ——小花美穂『こどものおもちゃ』」法学セミナー791 号（2020 年）1 頁以下。
- 「近代日本と『個人の尊重』」論究ジュリスト 36 号（2021 年）45 頁以下。
- 「戦時下における学問の自由」法学セミナー797 号（2021 年）14 頁以下。
- 「日本憲政史における学問・教育の自由と課題」憲法研究 9 号（2021 年）41 頁以下。
- 「改革・階級・憲法——日本社会の歴史的条件」蟻川恒正ほか編著『憲法の土壌を培養する』（日本評論社、2022 年）117 頁以下。
- 「近代日本憲法思想史序説——『内なる天皇制』の観点から」赤坂幸一ほか編著『日本国憲法のアイデンティティ』（有斐閣、2023 年）74 頁以下。